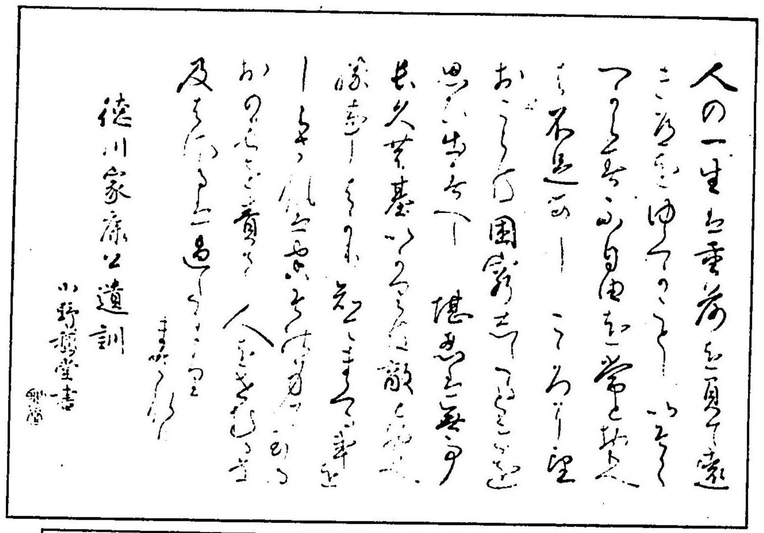


人の一生は重荷を負て遠
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

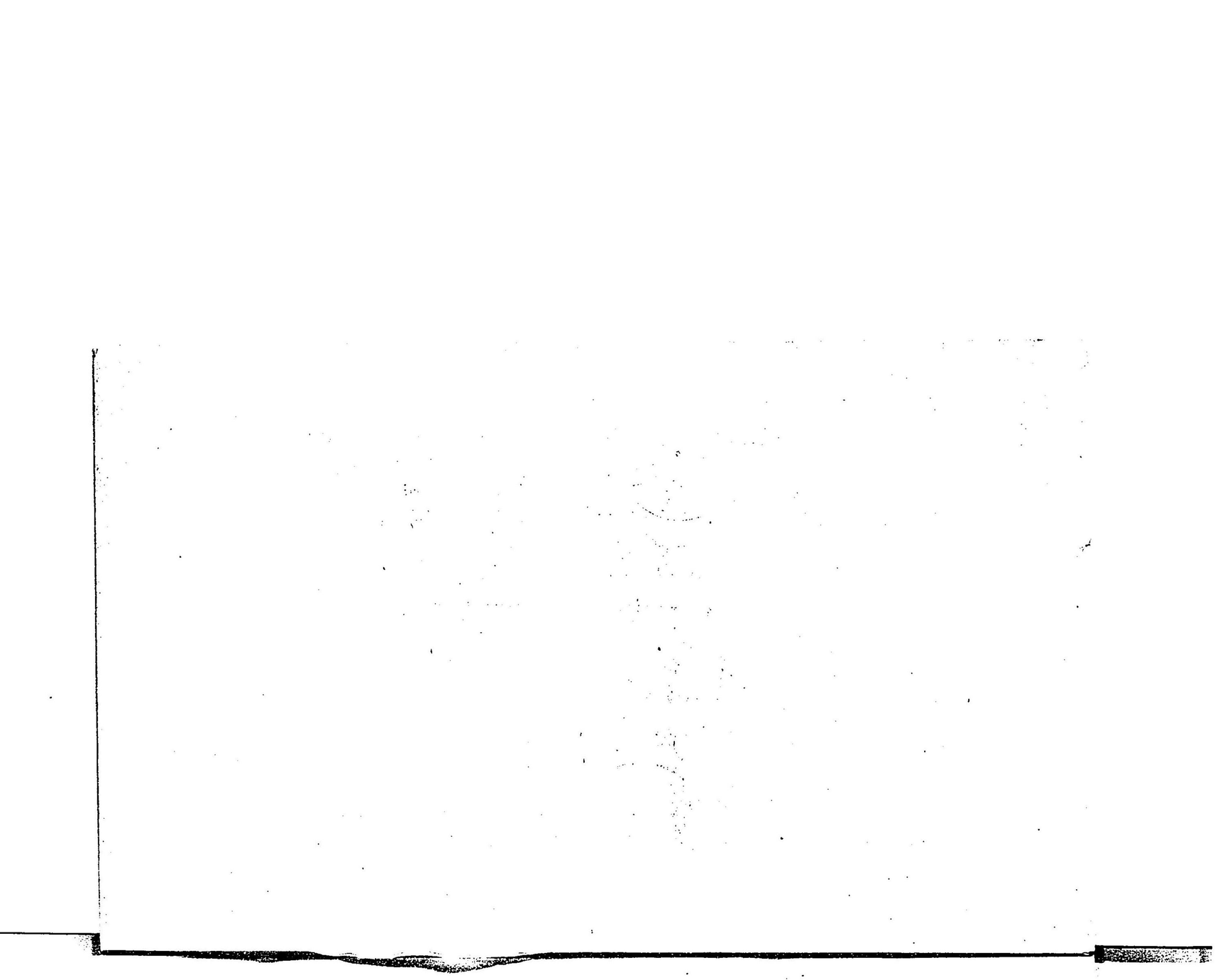
徳川家康公遺訓

小野藤堂書

Precepts of Iyeyasu.

Life is like unto a long journey with a heavy load. Let thy steps be slow and steady, that thou stumble not. Persuade thyself that privations are the natural lots of mortals, and there will be no room for discontent, neither for despair. When ambitious desires arise in thy heart, recall the days of extremity thou hast passed through. Forbearence is the root of quietness and assurence for ever. If thou knowest only what it is to conquer, and knowest not what it is to be defeated, woe unto thee! it will fare ill with thee. Find fault with thyself rather than with others. Better the less than the more.

(Translated by K. Wadagaki)



序

遠川家康。閑宿國榮家之法於傾乞海。々々擁護玉
種之答曰。壽福遠廉愛威恕七者備焉。無聞而可。無
家而榮矣。即顯之象。家康大喜。故每酒而言之。所得七
福神也。嗚呼遠川氏之天下。而榮以保三百年者
矣。良有以哉。今茲明治戊申。有志諸彥。胥謀建碑于
江東七福神祠。以便衆啟賽詣。宿田君寬理之事。以
謂世人未知七福神所由來者多矣。宜著一書。使其
知有所信焉也。於是洪濤獵諸書。且質諸識者。以成
此冊。憲序於予。受而閱之。文簡義晰。中挿手毛圖畫。

以備本邑義解及寶地系照。而尤其揭家康訓戒。是
所知田頃博士所謂以貽政人也。可謂判之周匝矣。
夫人誰有不希宿國榮家者。予亦其一信焉。故在
閣而能有之。在家而能榮之。是可不悅哉。此書一出。
讀者能知其信憑。上閣知有之。在家則榮之。守正
遠川氏治世。而榮者不予之哉。思矣。此書雖一小
冊子。乃知有可不讓。至經異傳者也。是為序。
明治四十一年七月十七日

香閣主居通緣撰并書

18-870

七福神

鶴岡専念
富田豐春編著

第一章　七福神の由來

抑も、七福神とは、壽老人、大黒天、福祿壽、恵比須、辨財天、毘沙門天、布袋和尚等の神を云ふ、其中大黒天と恵比須の二柱は日本の神併し大黒天は原籍が印度にある)、辨財天と毘沙門天は、印度の神、壽老人と福祿壽は、支那の仙人、布袋和尚は、支那の僧侶なり。さて此日本、印度、支那の神を集めて七福神とせしは、何時頃より初まり、又た何人のせられたかと云ふに、種々の説あり、七福神正傳と云ふ書には七福神の傳を掲げて、其奥に「此の如く守る時は、人として惡事に依るものなく、自から積善の餘あらんと、忝なくも弘法大師の御工夫にて此の如く集めたまふなり」とあり、三養雜記と云ふ書物には、七福神は狩野家にて古く此圖を畫きしより已來、世人皆く畫くことゝなりしやう覺ゆとありて、又天

明治 7 39
内交

海之を工夫すといふと書き加へてあるなり、同じく三養雜記に狩野松榮より古きものを見ずとあり、故に弘法大師の工夫と云ふは信せられず、これは矢張徳川家康公の時に、天海大僧正（後に慈眼大師）が工夫せしと云ふ方正説と思はるゝなり家康公は大の佛法信者にて、毎日念佛を六萬遍も唱へられ、常に此天海大僧正の教化を受けられしと、又金地院崇傳長老などにも佛法を聞かれたと云ひ、或る日の事家康公天海大僧正に向つて、國を富まし家を榮かえさするには如何にせばよろしかるべきやと尋ねられし、スルト大僧正には、仁王護國經の意を説き示して、此經を讀誦し此經を解義し此經の教への如くに修行せられなば、經にも七難即滅、七福即生、人民安樂、帝王歡喜と演べられ、天災地妖の難もなく、國土侵略の憂もなく、民安く國治まらんと、いと精しく説かれしに、家康公さらばその七福と七難は如何なるものぞと、問はれしかば、大僧正は經には、智恵福、眷屬福など一々説きあれど解し易く之を云はゞ、壽命、有福、人望、清廉、愛敬、威光、大量の七つをこそ、最も得難き福徳なれとて、直に筆を執りて、壽老人、大黒天、福祿壽、恵比須、辨財天、毘沙門天、布袋和尚の七神を取り合せて畫かれたりき、家康公大に喜ばれてこれを狩野某に命じて畫かしめられたのが、抑も七福神の始りにてありしと云ふ。

第一節　壽老人

人生第一の幸福は、壽命長久に在るなり。因て七福神の初めに延壽の神則ち壽老人の傳説を掲ぐべし、壽老人又南極老人とも稱す、南極老人星の化身なりと云ふ、老人の杖の頭に結附たる一巻は、人間の壽命の長短を記載せる者にて、所謂司命の巻是れなり。其鹿を伴ふも故あり、述異記に云ふ鹿千年化して蒼と爲り、又五百年化して白と爲り、又々五百年化して玄と爲る、漢成帝の時中山の人玄鹿を得烹て之を視れば骨皆黒色なりと、仙者の説に玄鹿を脯と爲し之を食すれば二千歳の壽を保つと云ふ（世人競爭場裡抔に中原逐鹿等の語あり蓋し此故事によれるなら ん、鹿其音祿に通ず）天祿を指すなり、又此壽老人は老子の事なりといふ一説あり老子は孔子と同時代の人にて孔子禮を此人に聞かれたと云ふ程の大聖者にして、母の胎内より生れし時已に白髪にて其終る所を知らずと云ひ、支那人殊に此老子の教を奉じて居る人々は、これを天尊の一とし、太清道徳天尊、又は太上老君と

云へり、其壽命は量り知り難く生前母の胎内にあること八十一年、後雲に乘りて太虚に去られたと云ふ程なるが故に、壽命の長久なることは云ふまでもなきことなりかし。

第二節　大黒天

壽命長久は誰れしも望む所なれども、壽命ばかり長きも貧乏で病身にては生ける甲斐なし、是れは却て諺に云ふ命長ければ耻多しで、幸福どころではない、ソコデ壽命の次ぎに有福と云ふことを示されて大黒天を描かれたり。

此大黒天は大已貴命即ち大國主命のことにて、其大國主の大。國てふ二字を字音にてダイコクと讀み、更に之を天竺の大黒天に附會し、俗間には遂に大黒と書けることゝはなりしなり、天竺の原語にては、摩訶、伽羅と云ひ、摩訶とは大の義伽羅は黒の義なりといふ、按ずるに唐の三藏沙門義淨が南海寄歸傳に云く、西方の諸大寺には、食厨の柱の側、或は大庫の門前に、木を彫て形を表はし、或は二尺又は三尺にて神王の狀を爲し坐して金嚢を把り小牀に踞る、毎に油を將て之を拭ふが故に其色黒し、是れ摩訶伽羅即ち大黒神なりと。是れ附會說の起る所、而して我國祀る所の者狀貌といひ衣服と云ひ共に天竺の者に非ず、且其履む所の米俵は我國の外、他邦になき所なれば、我大國主命なるや知るべし、其袋を負ひ給ふは八上姫の許に通はれ給ひし際の故事に基き、鼠を副ふことは孫美の國に於て、野火の難に遇ひ給ひし時、鼠來りて內者富良々々外者須夫々々といひて、地に穴あることを教へ奉りし故事に基けり。子のヒを祭日とするも此に據る、一說に或書に北方の玄武甲子の年甲子の日に當り、天竺摩訶陀國の王子を降誕す、其色黒し故に大黒太子と稱すとあり、北方は子の方にて、子は十二支の首、甲は十干の首初なれば、甲子の日之を祭ると云ふ、信じがたし、其持ち給ふ槌はもと槌にてはなく、此御國を經營し給ふ際杖かれたる廣矛の訛れるなり。

出雲の國大社天日隅宮より出る大國の像は、珠を兩手に持ち給へり、又佛者の大黒と稱する者には、種々の形あり、佛像圖彙に據れば、比丘大黒は僧形にして米嚢を戴き、王子迦羅大黒は冠をつけ右の手に輪鉾をもち左の手を屈す、摩迦羅大黒は丸き頭巾を著け右の手に槌を握り左の手に袋を持て、足荷葉に乘れり外に三面大黒あり、是は傳敎大師叡山草創の時示顯したる者なりとぞ。

大國主命の國家を經營し、庶民に福し給ひし御功績は、神典に詳かなればこゝに贅せず、其福神として崇め祀るは最も其理あり。

神像を造るに、新家を建るの際、大黒柱太極柱の訛りなりの一片を用ゐ、又は長橋第三板を用ゆるの故例あり、其槌と袋に就ても槌は勤勉を示し袋は貯蓄を奨勵する等種々の說あるなり。

第三節　福祿壽

壽命があつて而して有福であれば、人間の幸福は足りたかと云ふに否らず、如何に長命をして、金滿家であつても、人に憎まれては何にもならぬ、福分の外に、德を積んで、人望を有せねばならぬ、福と德との二つは、共に缺くべからざるものである、此の人望を得ること、卽ち德行を說かん爲めに示されたのが福祿壽である。此福祿壽と、壽老人とは、傳ふる所の形は異なれども、一人別名のよし、谷響集其他に見えたり。其人間に現せしは、宋の代なり、風俗記老人星傳に曰く宋の元祐年間、京師に一老人あり、長け纔かに三尺、身と頭と相半ばす、目は秀で、髯ゆたかなり、卜筮を事とし、市に遊ぶ錢を得れば、酒を飮み、其頭を叩いては、吾身は壽を益す聖人であると云はれて居りし、事、上聞に達して、內殿に召して幾歲なりやとお問ひになると。老人は臣は南方より來たる者にて、酒に耽りて醉はねば、お答へが出來ぬと。依て酒を賜はると。さて云ふやう臣は黃河の淸んだ事を屢々見たりと。此黃河と云ふ河は、支那の大河で、其名の如く常に濁りて黃色であり、千年目に一度澄むと云へり。然らば此老人は餘程の長壽者であると、思召して居ると、俄かに其人は消え去しと、又道家に、漢道州の矮民、楊公成を福祿神と稱する事、三敎搜神大全に見ゆ、浙江には元旦に上座の壁前に大卓を置き、福祿壽三星の畫像をかけ祝ふと云ふ事、安永甲午の漂流記に出づ、これに三星と書するは、卽ち、福星、祿星、壽星の三辰にして、一神にあらずとの說は昔よりあり。市川寬齋にも福祿壽三星像に題する詩あるなり。其名を聞くさへいと芽出度に、之れに萬年の龜、千歲の鶴を副ふ、世人の歡迎するや宜なり。されば、此福祿壽の三つを、人々が望む如く、德行を爲して、人に慕はるゝ事が肝要なりとす。

第四節　惠比須

人は清廉潔白の德なかるべからず故に玆に廉潔の神惠比須を示したり。

惠比須には、諸說ありて一定せず、蛭子命といひ、事代主命といひ、或は少彥名命といふ。蛭子とすること普通なれども、神代の卷に、此命は三歲脚立たず、よりて石樟船に乘せて、水のまに〳〵放ち棄つといふよし見ゆるのみにて、海には緣あれども其他に證跡なし。事代主命とするは、垂釣の事あるに由れり、少彥名命とするは、大國主命と合せ祀るよりいふものにて、その大國主命と共に天が下を經營し給ひ、御神體も殊に小にして、ヱビスの名に稱へばなり。(ヱビスは卽ちエミシにて物の常に異なる古言なり)又別に火遠理命又の名は天津高日子穗々手見尊とする說あり、此神は和田津海の美しき少女を娶り赤女魚の喉より釣を得終に天位を得給ひ、富貴滿足常に咲榮え給へば、此名ありけん、テとヱとは橫通音なれば、ホヽエミの命の義にや、ホヽと咲といふは常にいふ辭なり、俗に惠比須三郎といふは、此神第三子に當り給ふが故か、且つ大隅國桑原郡國分に八幡宮あり祀る神は穗々手見尊と豐玉姬なり、其大祭には、玉手筐と木にて鯛を作り彩りたるを、參詣の者買求めて海の幸を祈るといひ、又同國姶良郡帖佐の市中に、石祠

ありて、惠比須神を齋き祀る、木像男女二柱にして共に手に玉を持ち給へり、是れは彼の干潮珠滿潮珠なるべし、此處の土人も、海の幸を祈るとて、玉になぞらへ、丸き石を奉るといふ。然らば惠比須は卽ち此尊のことにや、尙ほ考ふべし。

邊陬にて此神を崇信せし者、早くありしと見えて。俊寬僧都の硫黃島々物語の條に、島の者共申しけるは、此御棲より、五十餘町を去りて、一の離れ山あり、峯高くして谷深し、其名を、巒岳と云ふ、彼岳には夷三郎殿と申す神を祝ひ奉り、岩殿と名付けたりとあり、又其像も古く世に行れしと見えて、吉野拾遺に康方が水練の巧なるを記して、浮上るを見れば、三尺許りなる鱸と云ふ魚と二尺許りの鯉とを左右の脇に夾みて、蛭子の樣して、岩の上につい居けるにとあるは、康方が風折烏帽子を着し狩衣を被ながら、水中にて魚を捕りし態蛭子に似たるを稱せるなり。かゝれば其頃の像は今の形と同じかりしなるべし。

世人又此神を商賣の守護神と稱し、商家の者殊に崇信す。理齊隨筆に云く、推古天皇九年聖德太子、市を始めて商人に賣買の術を敎へ、蛭子の神に誓て、商賣の守護神とす。後世惠比須と崇ること是に始ると。尙又大坂にて十日夷とて一月十

日貴賤群を成し、今宮の祠（西宮にも社あり）に詣て、福利を祈る、此神は聾にいますと傳へ、社後の板羽目を打つ、其音晝夜喧し、街頭には米花袋小判等を鬻ぐ、皆々買求めて、笹の枝に結附け、鳥帽子冠を買て、頭に戴き、笑ひ興ずるあり、或はホイカゴとて、蕩子冶郎千金を抛ち、愛妓を繡轜に乘せて、褒せしむ、其轜後には紅帕彩褊せる幇間、手舞ひ足蹈み、陪從追走して、いと賑はしきよし、攝陽群談大坂繁昌誌に見ゆ。

第五節　辨財天

清廉潔白、少しも貪る心のなきは、人の最も貴ぶ所なれども、餘り廉潔を旨とする時は、往々無愛敬に陷るの弊あり、因て次で辨財天の愛敬を示さる。

辨財天は、本名を能與總持大智慧衆大辨財天と云ふ、又宇賀神とも稱するを以て我稻魂神と相混ず、決して同じき者にあらず、世に謂ふ所の辨財天は、佛說の者なり、最勝王經に曰く、辨財天は閻浮の長姉にして、或は山岩深險の處にあり、或は坎窟及び河邊にあり、或は大樹諸叢材にありとて、其在す所を示して云ふ、故に水畔穴中に祀ると、これ世に水邊に辨財天を祀る理由なるべし、唐の不空三

藏の譯されし佛說最勝護國宇賀耶頓得如意寶珠陀羅尼經に云ふ、一の神王あり、名けて宇賀神將といふ、無量劫より以來大慈大悲を修習して、一切衆生の爲めに大良福田となる、其形は天女の如く、頂上に寶冠あり、冠中に白蛇ありて、其蛇の面老人の如く眉白し、又此神王、身白蛇の如く白玉の如しとある。この宇賀神將とは辨財天の事にて、此神、西方淨土にありては無量壽佛と號し、娑婆世界に在りては如意輪觀音と稱し、日輪の中に居しては四州の闇を照し、枕枳尼末形を現しては福壽を衆生に施し、大聖天の身を現じては二世の障難を拂はしむ。愛染明王の形を以てしては一切衆生の爲めに愛福を授けて終に無上菩提に至らしむなどゝ經文に詳しく示されてあるなり。

一說に、嚴島、竹生島、江の島等に祀る者は、其實辨財天にあらずと、然れども經文にも云ふ如く、其在す場所によりて種々の變化を現せしむるが故に、從つて其形も或は三面なるあり或は七面八面なるあり、又或は六臂八臂なるものあるべく、世人皆以て辨財天と爲し、盛んに其功德を稱す、龜田鵬齋にも江島天女廟記あり、以て參考とすべし。

第六節　毘沙門天

福徳を求むるには、愛敬も必要であるが、又儼然たる威儀もなければならぬ、親が子を育つるにも、可愛がるばかりで少しも叱ることがなかつたなれば、其子は決して立派な人間に成れる筈はなし、今吾人が世の人と交際するにも、愛敬ばかりを専門として、少しも威厳と云ふものがなければ、小人には狎れられ、君子には斥けられ、其愛敬も巧言令色となるなり。故に辨財天の次に毘沙門天を畫かれたり。

毘沙門は、梵語にて、支那では多門と譯すより、毘沙門天又多門天と云ふ、何故に多門といふかとなれば、福徳の名四方に聞ゆるとの意にて多門とは云ふなりと諸天傳に見ゆ、陀羅尼集には、父の名は婆難陀、母の名は密閣盧と申して、身に金の甲を被り、左の手に如意寶珠を取りて、足には藍婆、毘藍婆と云ふ二の鬼を蹈んで居る、其金の甲は惡魔の軍を除かん爲め、其左の手の寶塔には八萬四千の法藏、十二部經の文義を具し、右の手の寶珠よりは無量の財貨を出して、衆生に與へ玉ふ姿を現はせしなりと云へり。簸簎內傳の註に毘沙門天は三界に餘る程の寶を持ち給ひ、善根の人に與へ、名利の人に與へず、世には善人少く、不善の人多きが故に、其寶餘りて、毎日須彌山三つほどの寶を燒き棄て給へりとあり。古より軍人は多く此神に歸依してをる、楠正成は幼名多聞丸と云ふ、其父母志貴山の毘沙門天に祈誓して生れし故なりと。又上杉謙信は、殊に之を崇信し。毘沙門の毘の字を旗印にせりと云ふ。此毘沙門卽ち多門天は北方持國天は東方、增長天は南方、廣目天は西方にて、これを須彌山半の四天王と稱す。聖徳太子が佛法に反對せる物部守屋を御追討になる時、頭に四天王の像を戴き。我若し勝を得ば、必ず四天王寺を建立すべしと誓はれき、後終に勝ちたまひて、四天王寺を攝津に建て、其寺中に、敬田、悲田、施藥、療病の四院を設けて貧民の爲めに幸福を得せしめられたり。是れ抑も我日本に於ける慈善事業の初りなりしと云ふ。

又一說あり、北方天王の像、其身に種々の天衣を著け、左手は、臂を伸して消を執り地に拄へ、右手は、肘を屈して佛塔を擎げ、身長一丈八尺、是れ今世に傳する所の者なりと。

第七節　布袋和尚

幸福を求むるものは、亦大度量なかるべからず、因て最後に布袋和尚を示せり。

布袋和尚は、梁の時の僧にして、自稱して契此と云ひ、時に長汀子布袋師と號す景德傳燈錄卷の二十七に曰く、此布袋和尚は、支那國明州奉化縣の人にて、其形は、額の巾が廣く、腹が大きくして、常に杖を以て、一の布袋を荷ひ、市の中や村落を歩ひて物を貰ひ、餘りあれば之を囊の中に入れ、悠々として笑ひ居れり、人が嘲るも怒らず、罵るもこれに向ふことなしと、又貞明三年丙子の三月岳林寺の東方なる磐石の上に座禪して

彌勒眞彌勒、分身千百億、時々示二時人一　時人自未レ識。

と云ふ偈を遺して、寂然として遷化す、梁の大祖これに定應大師の號を諡られたり世人此和尚を彌勒の化身なりと稱すと。三佛傳記には、錫杖と布袋との外一物もなし、たゞ十八人の小兒ありて諄しく之を逐ふ、しかも何れの兒なるやを知らずとあり、兎に角此和尚心廣くして大量なることは疑ひなし、大河は細流を撰ばずとて、大きな流れは入れてやる細い流れは入れてやらぬと、撰擇をしては、到

底大河にはなれぬ、多くの人に交際する中にも、いろ〳〵の人がある、それをあれはどうである、これはどうであると、愛憎の念を以て撰擇をしては、決して立派な人にはなれず、古人の語に、友必ずしも擇ぶを要せず、操守堅ければ擇ばずしても可なりと、故に自身守る所あつて人に欺かれざれば、如何に惡人に接するとも愛ふることはなし、されば又他人が少し位の惡事をしたとて、大に怒る必要もないのである。

右二書に據れば、いかにも彌勒の化身に似たれども、其樣は乞食僧なり、然るに之を福神中に算するは何ぞや、意ふに福とは美衣美食して重寶を持するのみにあらず、笑を含んで愛ふる所なく、小兒を伴ふて無邪氣なる處、亦福なるを示せるならむか、借問す袋中何の有る所ぞ、但しは本來無一物か、否々大千世界此中に在り、呵々。

第二章　七福神の由來

七福神の由來傳說等に關しては前章に於て略之を論述し盡せりと雖、京都清水寺堂內なる扁額の解說は七福神の由來に就き頗る參考とするに足るべきものなれば往々にして重複の個所なきに非ずと雖、以下其全文を引用して世人の一粲に供せんとす。

第一節　蛭子

蛭子は日本紀に云。伊奘諾。伊奘冊の二神、蛭子を生給ふ。此神已に三歲といへども脚猶立ず。故に是を天磐櫲樟船に載て順風放棄云々。而して其船攝州武庫郡の浦に泊る。其後里人廟を立て祭る。甚だ靈驗あり。西の宮の神廟是れ也。神社啓蒙に俗に夷三郎と號る者は非なり。夷は別に一氣の神也。蛭子は天照太神の弟なり。

或記云。神武天皇。長髓彥と戰ひ給ふ時。天軍矢を盡して度を失ふ、椎根津彥神乃ち持つ所の箭より數萬の矢を出して與ふ、天軍氣を得て逆賊を射退く。又食を盡しぬ。食を箱の中より得て諸軍卒に與ふ。又箱の中より品々の資を出して其なきものに代て來り。御軍富饒天孫大に怪給ひて之を問て曰。汝何によつて自在の神力の術あること斯の如きや。椎根津彥神天孫に答て云く。吾は由ある神なり。後日に是れを申さん、今强て是を問しむる事なかれと、其後天下を治し給ふ時。天孫また此由を問給ふ。椎根津彥神云。吾は是天祖の始の子。蛭子命大神なり。今來て汝の尊を助く。吾世の富事を司る。畝田には糧を守て幸を得。軍には戰を守て幸を得。朝には事を守て幸を得。市に賈を守て幸を得。富を持つ神なり。往て廣田國に住と云々（今瀨津國。廣田の大神の祠に在す西宮大神なり俗に得美栖と稱す）。

第二節　大黒天

大黒天。天佛なり摩利支天の如にして。兵家者流は是を崇めて軍利を祈る。浮屠には是を信じて供養を乞。民家には常に敬て幸福を祈る。佛說摩訶迦羅。大黒天神經云。今自在業力を以ての故娑婆世界に來り。大黒天神と顯れ。乃至佛に白して言く。我一切の貧窮無福の衆生に於て大福德を爲ん。今優婆塞の形を現して。乃

至爾時世尊顏を開き咲を含み。咒を說て曰。薩謨三曼多沒馱喃唵摩訶迦耶娑婆訶

爾時大黒天神佛に白て言く。若未法の中。衆生有て。此咒を持る者。我體若は五尺。若は三尺。若は五寸。其形像を刻み伽藍に安置し。若は家內に崇敬せば。我七世天女眷屬八萬四千人の福德神等を遣して。十方に遊行し。每日一千人を供養せん若我所說虛妄あらば。永く惡趣に隨て。本覺に還ざらん。若又種々珍菓美酒を以て供養する者には。將に甘露を降さん。

○摩訶迦羅唐には大黒天神と云ふ。大神力あり壽無量千歲云々。

○今諸寺の食厨及び庫門に大黒天を祀事は。南海寄歸傳云。西方の諸大寺。咸く食厨の柱の側。或は大庫門の前に在て。木を彫て形を表す。或は二尺三尺にして。神王の牀を爲る。座して金囊を把。却て小牀に踞す。一脚地に垂る。每に油を拭ふ黒色を形とす。號して莫訶歌羅といふ。卽ち大黒神なり。古代より相承して云。是大天の部屬にして性三寶を愛す。五衆を護持して損耗なからしむ。求るものは情に稱ふ。但食時に至て。厨家每に香火を薦む。所有の飮食隨て前に例す云々。

大黒。傳敎大師に示現して曰。我每日一千人を供養して以て寺院を護ん。大師云く。我山に三千の衆徒あり。請ふ永くこれを供養する事を。大黒許諾す。乃ち比叡山に三所各大黒社を建て護法神とす。日蓮上人三面の大黒の讖文に件の事を載せ且云く每甲子日。生黒豆百粒をもつて祭るべし。是秘之秘也と云々。

○今普通に用る所の大黒の像を見に。圓き頭巾を被り。右の手に槌を持。左の手に袋を持。兩脚に米俵を踏めり。俵は日本の製。以て米穀を盛の草器なり。其衣服もまた日本の風俗なり。舊大黒の本形は下に蓮華を布き槌の印を結んで槌は持たず。俗傳へて鼠をもつて使獸とするは。甲子の日を用ゆるより起るか大黒奚ぞ每に米穀を竊むの獸を愛せんや。

○一說蛭子は蛭兒の尊にあらず。事代主命なりと。此神は大己貴尊の御子なり高皇産美尊。天孫。瓊々杵尊。豐葦原。中國の主とし給ふ。先づ經津主。武甕槌の二神を出雲國。五十田狹之小汀に至て。大己貴に問て曰。皇孫の君此地を臨み給ふ。汝當に避べきや。否や。大己貴對て言。我子事代主神は。三保が崎にあり。使者。稻背脛を遣して是を問はしむ。事代主云。今天神此勅問あり。我

父避奉るべし。吾又違ふべからずと云て父子ともに避る。大己貴。杖く所の廣矛を二神に授て云。吾此矛を以て卒に治功あり。天孫此矛を用ひて。國を治め給はゞ。かならず平安なるべしと。遂百不足之八十隈に隱云々。

○大黒は大己貴尊なり。袋を負ふて稻羽國氣多崎に到るあり。大己貴一名大國主神大黒大國音相近し大國を持の意によりより。福神とし。事代主は事を代と云緣によつて。商家是を尊信すと云々。

○商家蛭子大黒の像を造るに古橋板の三枚目の板を用ゆ。橋の三枚目はかならず人の踏所にて。千萬人の愛を受るの謂か。

第三節　毘沙門天

多聞天梵に毘沙門と號。福德の名四方に聞ゆるを以て。多聞と翻す。左の手。臂を伸。肘を執。地に柱。右の手。肘を屈て。肩を踏。下に雲を作。以て是を擁。天竺は北方を以て上とす多は東面則北は是左なり法華普門品曰。毘沙門身を現して爲に法を說。法華義疏云門の身をもつて得度すべき者には。卽毘沙門北方天王と云。多聞とは恒に佛道場を護て。常に說法を聞。故に多聞と云。大論云。秦には多聞と云。夜叉及び羅刹の主たりをもつての故なり。

又普聞と翻す。佛掌に古佛の舍利塔を擎しむ。金光明經云。多聞は種々聞と名く水精山に居と云々。般若研掘羅軌云。大寶金剛の甲冑を着す。左の手に三戟を執る。右の手に鏃を托す。一云夜叉羅刹の二鬼を踏。塔を擎。鉾を持。或は金色。或は青色。或は白色云々。

第四節　辨財天

辨財天。貧を轉じて福德圓滿白蛇自現三日成就經。宇賀神王福德圓滿陀羅尼經あり。

辨天經曰。宇賀神王。形天女のごとし頂上に寶冠あり。冠中に白蛇あり。其蛇の面老人の如し。眉白し。此則諸佛の出世毎に逢奉る。衆生を利益する事年久き瑞相なり。復此神王は。身白蛇のごとし白玉の如し。八臂あり。左の第一は鉾矛。第二は輪寶。第三は寶弓。第四は寶珠。右の第一は劍矛。第二は棒。第三は鎰。第四は箭。頂に如意寶珠圓光あり。復十五の王子あり。其形童子なり。或時は面

面に三摩耶を持し。或は如意珠を執て。神王の左右に圍繞せり云々。

十五童子所謂　印鈴童子　官帶童子
筆硯童子　金財童子　稻粢童子
斗升童子　飯器童子　衣裳童子
蠶養童子　酒泉童子　受敬童子
生命童子　從者童子　牛馬童子
船車童子

辨天經曰。餘時宇賀神王。及び十五童子。各此呪を說き已て。大地六反震動し。天より七珍萬寶を雨す云々。

宇賀耶得如意寶珠陀羅尼經に云。一切衆生の爲に大良福田を作る。福德圓滿陀羅尼經云。此より東南の角に三神王あり。一には飢渴神。二には貪欲神。三には障礙神と號く。無始已來衆生の身相離れず。十方の諸佛衆生憐愍のために無盡の福德愛敬を施し與へ給へとも。天蓋の頂上を覆ふが如く。其福を致さず。時に宇賀神王。頂上に白蛇を冠りするは。貪欲神を降伏せんがため。右の手に利劍を持は障礙神を降伏せんがため。左手に如意寶珠を持は。飢渴神を降伏せんが爲に。巽の方に向て是を護ると云々。

若此神王に供養せんと欲ば。白月一日より十五日に至る就中一日三日五日七日十五日亦若白月を以てせずんば毎月已亥日を用ゆべし云々。

第五節　布袋和尙

布袋和尙。傳燈錄に云。姓氏詳ならず。長汀子と號く。寧波四明の僧なり。奉化縣の岳林寺にあり。形肥額蹙。腹垂僧形他に異なり。常に杖を以て布袋を擔。凡供身の具盡く其中に貯へ。市に出て物を乞ふ。魚鼈を嫌はず。得れば則ち袋に入れ飢に臨んで必食ふ。雪中に雪に臥とも。身を沾さず。人これを奇とす。人に吉凶を示すに。かならず期に應じて忒事なく。隨ふ所。偃臥。天雨んとすれば。濕草履を著き途中驟行。光早には卽ち高齒の木履を曳。膝を竪て座す。梁の貞明二年岳林寺の東廊下の盤石に端座して化す。其後他州の人有て。師の亦布袋を負て見る。是に於て四衆競て其像を圖す。今岳林寺の大殿の東堂に全身現に存す云々。

○禪家布袋の像を安ずるは此謂か。

按ずるに。布袋和尚を福神と稱する故を知らず。其像笑て悶々たり。笑を含み萬人の愛を得るが故に福神と稱するか。大悟する時は足る事を知る。足を知るは福人なり。本地化の散聖にして。格言異迹世に顯赫たり。信じて禍を祈らば必靈驗あらん。

○布袋を圖するを見るに小兒に戲れ笑ふを寫せり。凡人に對するに笑を以て向へば小兒ずら馴親むる事を敎るものか。今二月初午の日。京師稻荷の社に詣る人。土隅人の布袋を買て竈の上の棚に安ず。これを布袋棚と稱す。斯することと年々七箇に及ぶを吉慶とす。民家七年事無ふして七箇を揃ふことは難きがゆゑなればなり。其七箇揃ふ時はこれを社地に納め。又初のごとく一箇より七箇にいたる。竈は厨下の前にありて厨下よりよく目のいたる所なれば。爰に布袋の笑たる像を安じて愛敬あらんことを表するの謂ならん。

第六節　壽老人

壽老人。南極星。或は南極老人星と云。南極は人の壽を主ると云。老人星は井宿の分にあり。天文書に云秋分の旦丙に見はる春分の夕。外に沒す。井宿の内の星の各の南。南極界なり。明大なる時は天下安寧なり。然らざれば否。此星人民の壽算を主る。南極地に入ること三十六度。得見べからず。故に其精神。地を出以て見はる其地を出ること又甚だ遠からず。長サ三尺。首元と相半なり。秀目。風俗記に云宋の元祐の間。京に一老人あり。豐髯。幅巾。垂服。卜を以て。日に市に遊ぶ。錢を得る時は飲む。或は其首を叩て曰。吾身は壽を益す聖人なり。一日中官あり。見て異なりとして。其形を圖し て上に奏す。旨あつて。內殿に召して上問給ふ。今幾年ぞ。老人の云。臣南方より來る。酒に耽て酔て能言ふ。遂に是に賜て飲しむ。一擧一石。徐々として云く黃河屢清を見る。上眷方に渥し。俄に其人を逸す。但覺ふ清風庭に滿ち白雲空に映ずるのみ。翌朝太子奏じ給ふ。壽星の顯。密に帝座に臨る。上益これを異み給ふ。方に知る。見る所の老人は。卽ち壽星なることを。探訪すれども竟に得べからず。其の圖を取り贊して曰。老人星矣。老人星。一朝酔レ酒走二天庭一○黃河屢見清二於世一○試問長生不レ見レ形。

第七節　福祿壽

福祿壽。今圖する所を見に其長と首元と相半する形なり。傳云。邪和璞。終南山に廬す。人の心を算するの術を得たり。暴に死する者を活す。道を學ぶ者多し。一日弟子崔曙に謂て云。異客來らんと。翌日果して一人至る。身の長五尺。濶さ三尺首其半にあり。緋衣。笏を執て髯を皷して大笑す。唇角耳を侵して劇談す。多く人間の語に非らず。崔曙趁て庭を過ぐ。客熟視て和璞に謂て云。これ泰山老師にあらずや。曰然り。食畢て去る。和璞。曙に謂て云。これは上帝なり。臣に戯てなり泰山老師と云。子復能く省や。曙曰。向に先生の言を聞に。某を泰山老師の後身と。然ども前身記すことを得ず。璞後に行所を知らずと云々。

按に壽老人を圖する時は老人の形を寫し。傍に鹿及龜鶴を畫く。鹿音祿。龜鶴は其壽を取か。福祿壽を圖するに。其形首元と相半するの像を寫す。風俗記に載るところ。其形と首元と相半するを南極老人星とす。按るに壽老人福祿壽本一體なるか。

或說に七福神の內福祿壽なうして吉祥天あり。

吉祥天は佛說大吉祥天女十二名號經に曰。此大吉祥天女の十二名號を知て。能く受持し。讀誦。修習。供養し。他の爲に說かば能く一切貧窮業障を除く。大富貴豐饒に財寶を獲ん。所謂吉慶。吉祥。蓮華。嚴飾。具財。白色。大名稱。蓮華眼大光曜。施食者。施飯者寶光。大吉祥。これを十二名號とす。大吉祥陀羅尼云。怛儞也佗。室哩。抳室。抳。薩溥迦。哩野。娑。馱頼。悉頼。々々々。阿。洛乞史若曩捨野娑溥賀。此陀羅尼及び十二名號能く貧窮一切の不祥を除き。有所の願求皆圓滿を得ん。若能晝夜三時に此經を讀誦し。毎日三遍し。或は常に受持して間らず。饒益心を作して力に隨て虔誠に大吉祥天女菩薩を供養せば。速に一切の財寶豐饒吉祥安樂を獲ん云々。

金光明經吉祥天品云能無量百千萬億の衆生をして諸の快樂を受しむ。乃至須る處衣服飲食資生の具。金銀瑠璃硨磲瑪瑙珊瑚琥珀眞珠等の寶悉く充足しめん云々。

諸天傳に大功德天と云夫福を修して世出世間一切の行願を成就せんと欲せば此天を祭るに如くはなし。故に名を題して隨其所求。令得成就。大功德天と云。

雷霆の轟くを認めて電氣の作用と解釋し、日月の廻るを見て遠心求心の二力ある所以の理と悟るは、是れ後世科學の進歩したる結果にして、太古の民は何の國といへども豈によく思想力の全きを得んや。宇宙間には到底人力を以て爲し得ざる現象あり、殊に想ふて天地萬物の創造に及べば唯奇異靈妙の感を起すのみにして星霧説、進化説などは太古人民の腦中に浮ぶべき由もなし是に於て天地奇靈の現象に眩惑し、驚愕し、畏怖するの餘、人類以上の者を假想して萬事其者の意志行爲に出づと爲すに至れり、支那にて天といひ、佛教にて佛と云ひ、耶蘇教にてゴッドといふは皆此の類の高尚なる者なり。既に奇靈の現象に驚き感じて人類より高き者あるを認む。故に日月の蝕するを見ては天の災を下す前兆と解し、烈風陰雨水災疫病も亦其怒りに由る者と解し、山を拜し、川を拜し、奇鳥を拜し、異獸を拜して敢て怪しまざる者比々皆然り。天を設け、佛を設け、ゴッドを設くるに至ては思想稍進歩せりと雖ども猶ほ

太古蒙昧の痕跡を蟬脱するを得ざる者あり、憐べし宗教の熱心は未開の世に盛んにして開明の世に衰ふ。其原づく所一に太古蒙昧の驚怖心にあればなり。コロンバスの亞米利加を發見するに及んでは既にノアの子孫、亞細亞、亞弗利加、歐羅巴に移住せりと云ふ聖經の陋説爲めに破れ。コペーニカスの地動説出づるに及んでは地球及び人類を本とする耶蘇教の基礎全く倒れたり。宗教は科學と並行し得べき者にあらず。科學益々進歩して止まざる世なれば宗教次第に萎微振はざるに至るは至然の理なり。歐洲今日の勢、耶蘇教は唯社會の外面に止まりて、科學の思想ある者は誠心之を信奉する者なく、洗禮は產湯と擇ぶ所なく、宗教は竟に一個人に向ては社會に處するの方便となり、一國に向ては他國を侵略する利器となれるに過ぎず。宗教の運命洵に悲しむに堪へり、宗教を以て社會の内部を統治する國亦危しといふべし。

我太古の大和民族が神として崇敬したるものは天にあらず。佛にあらず。ゴッドにあらず。日月にあらず。山川にあらず。豈にまた鳥獸の如き賤しむべきものならんや。其神とするものは耳目鼻口を備へ、七情六欲を有する普通の人類なり。

何が故にか之を崇敬する、曰く靈智靈能國を開き民を化したる聖人なればなり。如何に我日本人民なればとて太古は蒙昧ならざりきとは云はず。他國の太古の民の如く天地奇異の現象に對して驚怖の念を起したるに相違なし。されば此驚怖の念よりして、人間以上の靈物を假想せる他國の人民とは其撰を異にするものあるなり。抑も我國は家族的の國にして子孫臣民皆天神地祇の裔にあらざるはなし。皇室は宗家にして臣民は支族なり。衆支族宗家に歸向すること猶ほ北斗諸星の其樞星に於けるが如く上下分定まりて秩然紊れざる美風は他の諸國になくして獨り我國にある所なり。本立て而して末全し、皇祖皇宗を崇敬する情は推して現代の宗家に及び、現人神を敬ひて萬死之に竭し、又推して其支族の祖に思ひ及ぼし家と國と相離れず、又皇室と國と二致あることなく、忠孝の心愛國の情と融和混同して國家の基礎益々堅く、寶祚萬古に傳はりて天壤と共に無窮なるもの實に故なきにあらざるなり。

過去の世嗣にして將來の祖先たらんものは現今なり。此現今の主たる吾人の任亦重からずや。

過去は現今に存在し、現今は過去の形跡なり、將來は現今より生し現今は將來の種子田園たり。既往を知らんと欲せば現今に徵し、將來を卜せんと欲せば現今に鑑む。

物界の森羅萬象は千古變易少し、最も古今の差ある者は吾等人類なり、然れども人の人たるに於ては萬古同じ。物卽ち靈、靈卽ち物、靈物二界、其原や一。一なるが故に千古渝らず。大海は一滴に存し、一滴は大海を含む。天地は人に在りて、人は天地なり。自然の大靈元は人に顯はれ、人は自然の靈元を藏す。此人たる者卽ち我等に非ずや。宇宙千古の經歷は此靈元の展開に外ならず。されば男女と成り上下と成り。治者被治者と成り。農工商たり。學者たるを論せず、皆此靈元其の物なるを以て、其天分を諦知して自然の展開に對して盡す所あるべきに、人は其境遇に惑溺し、今日に逐はれ、單に農工商學者政治家と成りて又高尙の意志を見ず。農は鋤鎌の動力と成り、工は物品製出の器と成り、商は有無交通の運輸器と成り、學者は思想の復寫板。政治家は公有の出納其他の帳簿たるに止るに至れり。

是に於て乎自知の必要起る。自知に二あり、一は自ら己を知り、二は他に依り己に依らずてし身外の事物を知るを云ふ。

爾自身を知れとは古哲の名言にして、之を言ひまた書く者多けれども、之を行ふ者誠に鮮し。今や自ら己を知らんと欲せざるのみならず、己を知らざらんことを欲する者あり。夫の權門に媚び、他の塵を掃つて要路の葭にすがらんとする者糊口の資の爲めに自說を曲げ、他の左右するに任せて御用を勤むる輩眼中無丁字にも非れば少しは人たる者の何たるを知らぬことは無かるべけれども、良心の恥を蔽ふて屈從す、是等は自ら己を知らざらんことを欲するなり。然れども彼等の多數は幇間的行動により少しく權勢者に用ゐらるれば眞意に得々として誇る者是れ先天的に自己を知るの能力無きか若くは知るべき自己の價値無き者なり。若くは知るべき自己の價値無き者なり。

此外に自ら己を知らとんせずして、他人の力に由りて己を知らんとする者多し。此輩の寅畏するは世人の思はく、世人の嗜好世評の如何に在り。世人小說を好めば俄かに小說家として、世に知られんとし、先づ古人の著作等を讀で之れが燒直しを試み、法律持囃さるれば法律書をかぢり讀み、實業評判よき時は先づ會社の

受附にても在附かんとて奔走す。此輩素より見識無し、蓋し見識は自己を知るより來るものなればなり、故に己の能力如何、其傾向如何を知らざるを以て唯世の嗜好に投せんことを惟れ勤む。言はゞ自己を以て際物商賣品となす者なり。

第二類の者、卽ち身外の事物を唯他人によりて知らんとする者は、自ら己を知らざる輩の中に最も多し。是等は夫の所謂書物讀みにして創思の力無く、路を行くに人の提燈をのみ恃む輩なり。

夫れ書籍は過去の經歷と思想との記錄、または當代の寫影なれば、之れを讀みて我が參考に資するは素より大切にして大益あり。苟も學問に志す人は書を讀むべきことは勿論なり。然れども眞の學問は書籍以外の活天地に就て研究すべきことを忘る可らず。

學といふ字を「まなぶ」と讀み「まなぶ」は眞似ぶの義なりといひならはして學の本領は古の聖賢の言行を眞似るなりと心得來れる日本從來の習慣にては、特に己の所見を立る者を目して異端を唱ふるとか、邪說を張るとか認定することゝ成り來りしにより、學者としいへば唯多くの書を讀みて、他人の思想を受賣りする人と心得

たるは是非もなき次第なり、舊來我國にて聖賢の教と尊びたるは孔孟の議論なり而して孔孟素と支那人にして其所論は我國體に適せざること多きを忘れたるが如し。元來孔孟の徒は堯舜禹湯文武周公等を崇拜するものにして、支那に於ては如何にも其祖先傳來の道にして彼の國體には無上の教なるべけれども、我日本に於て支那の國體説を崇尊すとは何等の間違ぞや。第一に堯舜が支那の天下を讓受せしは我邦に於ては最大なる國體毀損なることを知らずや。是の如き基礎に建てたる教何ぞ全體を執るに足んや。但彼の教説の中に於て執るべきは、人倫五常の道即ち我邦に於て充分に備はれる道を彼れが五常とか名を附て説きたるものゝみ。然れとも尚ほ此五常の中に就ても、彼れは單に君臣有義と説く、是れ我邦に方ては説き足らざるなり、蓋し我邦の君臣は、單に主と家來の關係のみならず、祖先と子孫との關係をも併有すればなり。

佛法といひ耶蘇教といひ、其他と云ひ專ら未來の幸福即ち來世に對する心得を説きたるものは、人々各自の安心する樣信じて可なることにして、敢て吾人の問ふ所に非ず、蓋し吾人は道理を以て滿足すれとも、人には能力の差あり、氣風の異あり、道理一味を以て滿足する吾人と差異ある氣質の者多かるべければなり。然れとも是等の諸教に就ても、先づ自己の何たるを諦知せば、取捨の途自ら明かならん。

西洋の學問輸入せられてより。物理の説明、政法の講議等、種々耳珍らしきこと目新らしきことを見聞ずるに隨ひ、在來の事を舊習と目し、舊弊と卑下し、唯何も彼も西洋の新説を崇拜ずる樣成りしことのあるは。元來自知の明無く、唯書籍學問を專一としたる弊習の致す所、從前漢學を崇拜したる腦裡より、其本尊を除去したれば其代りを求めて洋學を本尊とし、前に漢學に對して表せし崇敬心の轉じて洋學に對して表するに由れり。畢竟するに腦裡に自己といふ本尊無きが故なり。

譬へば本尊無き堂宮に、或は稻荷、又は聖母、若くは彌陀、時としては地藏と其時々の人氣に任せて本尊を入れかへるが如き、是れ書籍學者の常態なり。

宗教元來良否なし、人に安心を與へて其品行を正しくすること最も多きを以て良教とす。理學は物の實際に合ふを以て眞とす。政體元來善惡なし。所治の國家に

最も多くの幸福を與ふるを以て最善とす。而して此最善最良最眞を撰擇する標準は自知の明に在るなり。

自ら己を明知するに非んば、如何か能く物事の己に適するや否やを判せん。要するに自己の何たるを知り、自己を以て諸説採擇の標準と爲すべきなり。而して此自己なる者の生住の處は何ぞ。我日本國なり。三千年以來東洋に獨立せる日本國なり。然れば此自己なる者、卽ち日本學者たる自己なる者は、日本國民たる自己たらざる可らず。換言すれば日本學者たる自己中には日本國家を包含するなり。此大なる自己は日本國體の元素、否國體其物卽ち自己なり。

此國體を知らざる者は卽ち日本國民たる自己を知らざる者なり。されば此國體たる自己を本尊とし標準とし萬事萬説を裁斷して、己に適するものを採りて、己を養ふの資と爲すべし。豈に己を舍てゝ他國學者の糟粕を嘗んや。焉ぞ己を棄てゝ他を本尊とすべけんや。

此必既に明にして立脚の地高く堅固なるに於ては。萬象として資せざる無く萬理として裨せざる無く。坤輿は我が役使する儘ならん。宇內萬邦の學者は我手代と

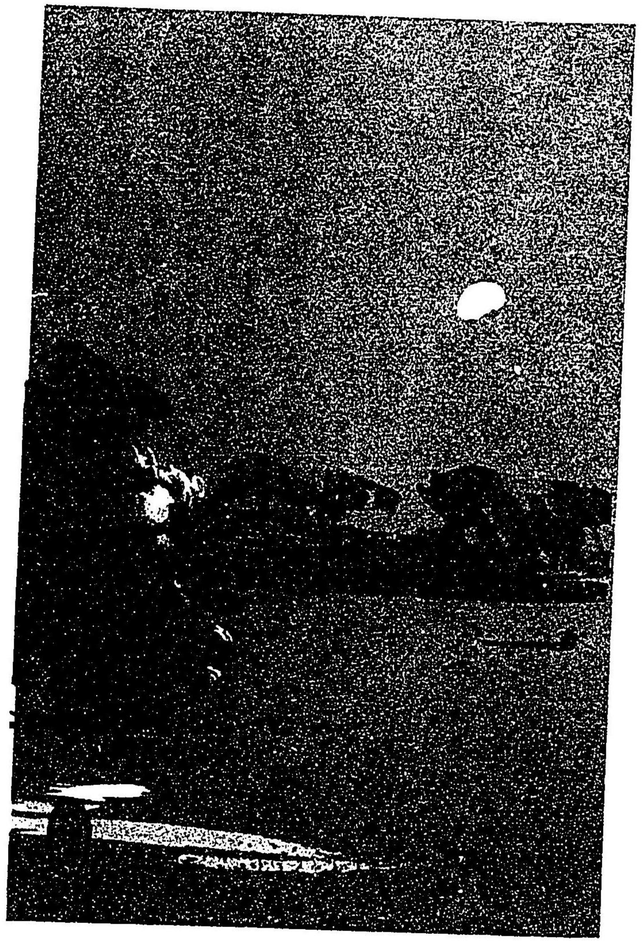
して隨處に思考を凝し、其講究の結果を報ずべきを捨て、諸學の精華を總合し來りて之を自在に應用し、以て我國體の光輝をして四海を覆はしむ。日本學者たるの本領是に於て乎灼然たり。要は自知に在て存す。

嗚呼、自己を知れ、自己を知れ、自知は日本國體を自覺するなり。既往の繰言は婦女老人の言のみ。謹むべきは後來に在り。日本帝國後來の隆替如何は五千萬の兄弟姉妹が各自家國的精神を蓄へ日本は世界の日本にあらず、四周繞らすに外敵を以てするを思ひ、縣國郡は日本國裡の縣國郡にして、一國一體毫も離るべからず、一箇人一地方の利害必しも唯一の目的にあらざるを曉り、都會は地方を利し、地方は都會を益し、農工商各其業を精勵し、相協力して改良を謀るあら。朝野の名士も、亦兄弟墻に鬩げども、外其侮を禦ぐの意を、片時も捨てず、翕然として興起すると否とに存す。凡そ競爭は社會發達の動機にして、競爭無くんば社會は忽ち腐敗の狀態に歸すべければ、一己人と一己人との間、數人と數人との間にも競爭は、固より缺くべからず、又生せざるを得

ずと雖ども、如今の時勢は、蝸牛角頭の小闘を許さず。茫々漠々たる大戰場は、卽ち六大陸、五大洋にして、割居群雄は、東西南北到る所に陣せるを以て、若し國家の二字を忘れて、小故の爲めに相反目するが如き國民あらんには忽にして他の利を增さんのみ、日本五千餘萬の人衆は、其れ之を思ふて、常に身體を保養育成し、心志を剛毅強固にして、大に進取の實力を積み毫も逡巡する所なくんば、富強の運に達すべきこと、豈に空中の樓閣ならんや。今や我日本帝國は、日淸戰役以來較や世界の注意を惹くに至りしが、日露戰爭の結果は、特に歐米列國をして我勇俘を驚嘆せしめ、其全提の餘威は以て一躍列強と比肩するに至りたり、されど軍事に於て成功したるが如く、他の方面に於ても、果して列強と對等の國力を有する歟、否、決して然るを得んや、嗚呼前途遠し、國力の增進を謀り富強の完全を期するは、吾人大和民族後來の義務なり、東洋の英國といはしめずして、世界の大日本といはしむるは、唯一の大目的なりと雖ども、固より一朝一夕の業にあらず、且つ二三子の企て及ぶべき所にあらざれば、依賴すべきは剛毅の氣象嗚呼振起すべし、國家的精神、機を失する勿れ、勢を殺ぐ勿れ、努力せよ神國の民。

自覺せよ、自覺せよ、我日本國民たる者、當に大に開國進取の國是を確立して以て、日本國民の天職を全ふせざるべけんや、皇祖肇國の始に當り、六合を兼ね、八紘を掩ふの詔は、豈に宇內統一の大業を宣ふものにあらずして何ぞ、之を列聖の偉業に鑑み之を 今上の聖旨に照すも、宇內統一の宿志のあらせ玉ふ所は、炳として光を日星に爭ふ、紛々擾々、强食弱肉の宇內を靖め、萬邦を綏撫し、世界の人類をして眞正の安寧、最大の幸福を享有するの域に達せしむるは、實に天意の存する所にして、復た日本國民の天職にあらずして何ぞ。此自覺あり以て宇內統一の理想は一層現實となり、人類の安寧幸福は、始めて其圓滿を期するに足らん、是に於て乎、宇宙の眞理、天地の公道に基き、人道の大義名分を顯彰し眞正文明の實現はる、而して人生の、目的亦達す、豈に夫れ愉快ならずや、嘻。

吾人が前數章に於て述べ來れる七福神は實に人の福德を進むる因緣なれば、各自至誠を以て祈願を籠る時は、靈驗著しく神慮に感應まし〳〵て福德其身に宿り心の中に、自然備はるものなり。されば此心の中の七福神に愛想をつかされぬやう



人々其職に怠るなく、正道を履んで迷ふことなければ、福徳圓滿、家運隆盛疑ひなく、彼の仁王護國經に說かるゝ、七難卽滅、七福卽生、人民安樂、帝王歡喜期せずして到る、嗚呼世人よ、努々怠る事勿れ、豈に夫れ忽緒に附すべけんや

江東勝地秡州稀。

宜月宜花又宜雪。

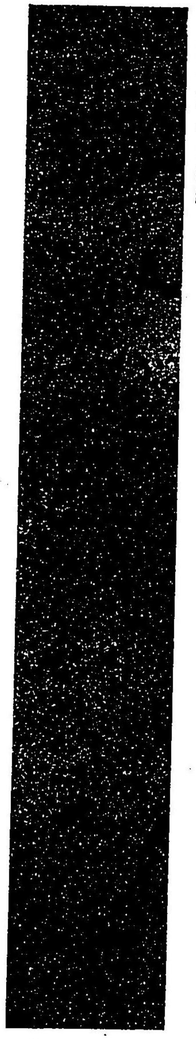
況有福神相笑依。

賽從綾瀬到三圍。

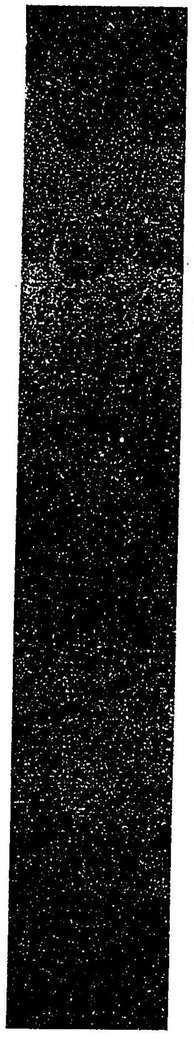
豊春

○隅田川六歌選

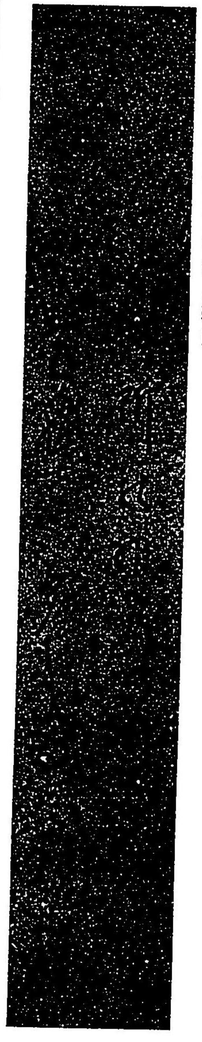
伯爵東久世通禧



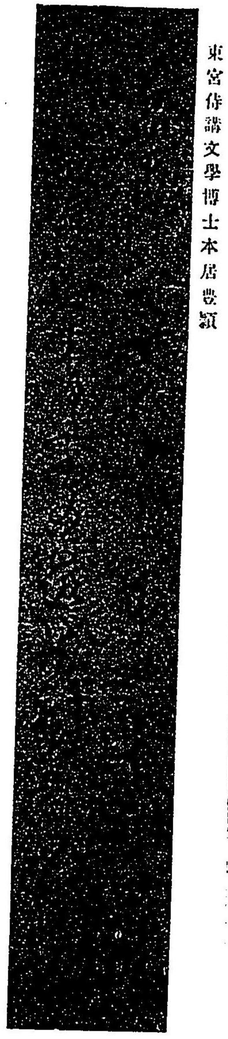
御歌所參候文學博士小杉榲邨



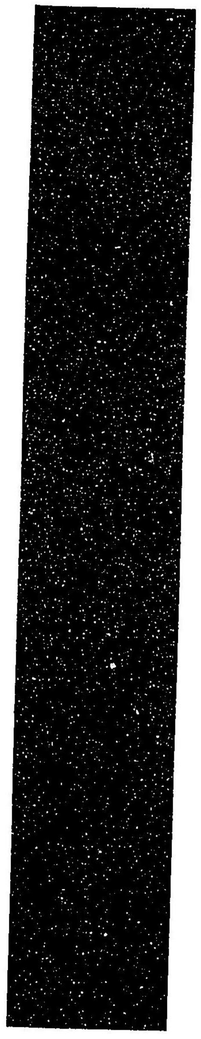
學習院教授文學博士井上賴圀



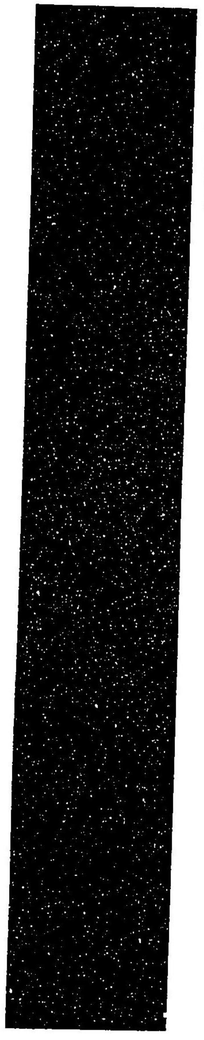
東宮侍講文學博士本居豐穎



大內青巒居士



大教正深川照阿



豐春

百花園所藏

隅田川七福神

肺田錦町　寫眞研究會製

七福會標碑銘揮毫諸氏

明治四十一年六月廿六日隅田川七福神標碑成刻成の爲め向島百花園の茶席へ各揮毫大家を招待し石摺となして之を展覽に供せる時諸氏同園の隅田燒へ染筆の興を添へられたるの眞景　（坪川撮影及製）

東久世通禧君　板本武揚君　渡邊國武君　土方久元君

千家尊福君　小池道子君

武第名角河圖故附
藏一所田繪並跡

隅田川七福神の沿革

初鶏の聲、曉の波を渡りでより、年の瀬の、人足繁く、夜深けの橋に、提灯を走らす時までも四時の眺望を、君が代の、盡きぬ例しに唄はれて、富士の白雪、薄紫の筑波山、何れ愛度き帝都第一の勝地、隅田川の堤に、江戸時代より、鎭座ませる、七福神は、文化、文政の頃、抱一蜀山人、文晁、千蔭、春海、鵬齋、詩佛、武清等を始め、文人墨客の丹誠に依りて、その名も堤上櫻と共に、世に著はれたり、されば春立つ朝の、綺羅を競うて、善男善女の詣づる、甚だ多かりしが、安政二年大地震のありてより、自から寂れ行きて、維新の後は、其名さへ人に忘られしが、今より十一年前、即ち明治三十一年の極月、有志の人々相會せる折柄、偶々七福神再興の話出で、記錄を漁り取調べしに、福の御神ことく〳〵く息災にてましますにぞ、扨ては此上もなき目出度ことよと、迎ふ新年の準備にとりかゝり、その所在地にそれ〳〵標札を建て、其角堂機一翁之が揮毫をなすよし、翌年一月元旦、初刷の諸新聞紙上に現はるゝや、遽に、都鄙一時の評判となり、我も〳〵と尋ね行き、參詣人の足跡絶ゆる間なく、近くは、小松宮殿下の特に迎拜遊ばされし事さへありき、扨巡拜の道順は

先づ三圍神社境内の惠比壽大國二神を始めとして、次は須崎町の弘福寺本堂内布袋尊、同町長命寺の辨財天、寺島村百花園内の福祿壽尊、同村白鬚大神を經て隅田村多聞寺の毘沙門天を拜すべし、これにて七福神の全部を巡拜し得るものとす、今左にその略縁起を記さん。

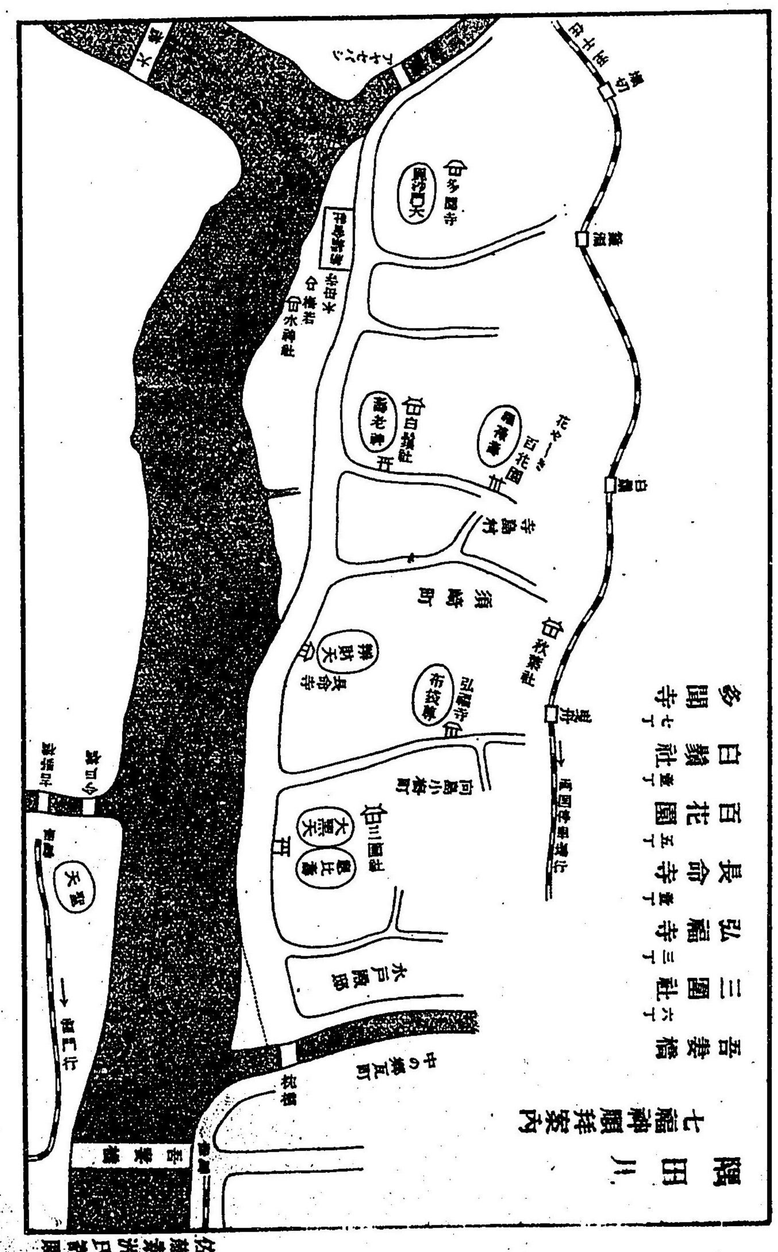
●祭　日

大祭　毎年一月一日より同七日まで

例祭　毎月一日　十五日　十六日

惠比壽、大國二神

向島小梅町三圍神社境内にあり、鎭座の由緒は詳かならざれども、享保年間三井家より奉納したるものにて、本體は木像なり、位置は舊と三圍神社の後なる今の梅林中に在りて、未社七社中の一なりしが、安政二年の大震災の後、同境内なる月讀神社に合祀せり、月讀神社は、本社の右側にありて東に面し、今より百四年前文化二年の扁額に、蛭子神、大黒天と二列に記せるもの、今尚ほ神前に掲げらる、舊例に依り、開運出世二神の・



隅田川、惠比壽
七福の内、
大國
二神
正三位千家尊福書
田國年鐫

隅田川
七福之内
毘沙門天
正二位子爵 榎本武揚

金像を出すと云ふ、社前の碑面は千家尊福男爵の揮毫なり。

布袋尊

向島須崎町牛頭山弘福寺堂内に安置し來りたる布袋尊の畫像は、同寺開山禪師に歸依深かりし板倉周防守の喜捨に係ると云ふ、享和年間將軍徳川家齊公遊獵の途次駕を此寺に枉げて親しく展覽し、一度城中に召上げたるを、其後同寺に下渡し、一層大切に秘藏すべき旨を命じたりと云ふ、左れば右の畫像は、同寺の重寶にして、之が保存上に憂慮すること年あり、然るに、茲に紳商大倉喜八郎氏が建設したる美術館内に、氏が印度より取寄せたる數百年の古色蒼然たる紫金銅製の布袋尊像あるよしを、有志の人々傳へ聞き、之を氏に懇望したるに、氏は慾て向島に特別の緣故もあることとて、速に快諾され弘福寺へ右の布袋尊を寄附することゝなり、即ち明治四十一年三月十五日を以ていよ〳〵布袋尊の遷座式を擧行し、爾來畫像は寶庫に納め、之に代るべき前記の布袋尊を本堂内に安置することゝせり、堂前の碑面は渡邊子爵揮毫

墨田川七福神

布袋尊

子爵渡邊國武書

田鶴平鐫

辨財天

向島須崎町寶壽山長命寺境內にあり、この寺はそのかみ、寶の山常泉寺と云ひ、境內に清泉湧き出でて般若水と云ひ炎旱にも涸れしことなし、寛永年間將軍德川家光公鷹狩りに出で、俄に不例となりし時當寺の住職孝海當山安置の辨財天は傳敎大師が一刀三禮の作にして靈驗あらたかなるにより、茲に祈願をこめ清泉を汲みとりて、之に加持し、中根壹岐守正盛をして將軍に捧げしめしに、忽ち快復せられしかば、將軍大に喜び、孝海を召して、その恩を謝し、當山號を寶壽とし、寺號を長命と改めよと命ひ且つ其の靈泉を長命水と名付けしと云ふ。

辨財天の本體は、古昔般若堂に安置しありしが、安政二年大地震の厄に罹りて、該堂破壞せし故、今は本堂の右側に安置せり、門前の碑面は掌侍從五位小池道子刀自の揮毫なり。

福祿壽尊

隅田川
七福の内
弁財天
正五位小池通孝拝書
田鶴年鏡

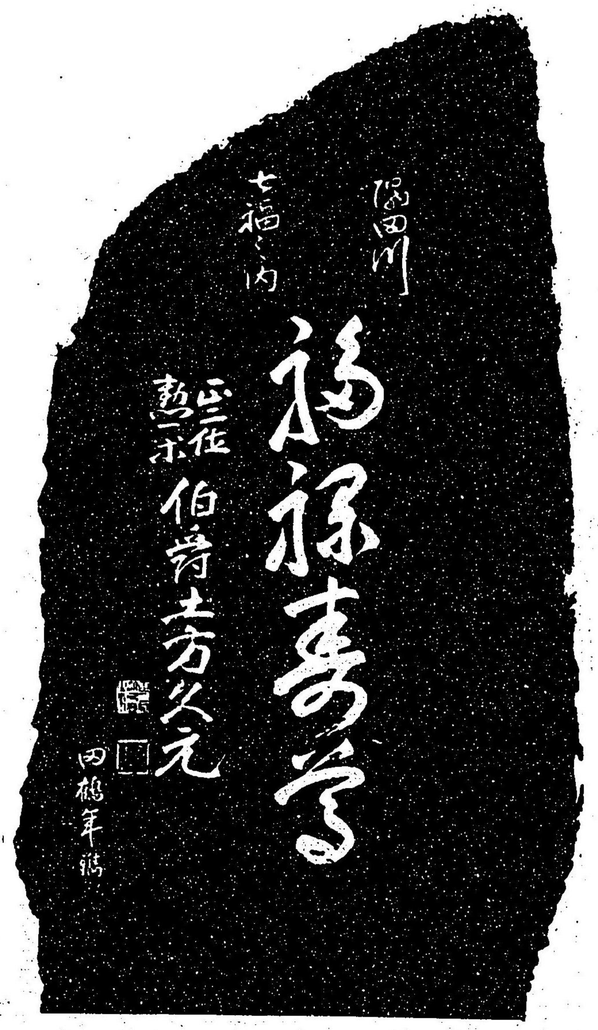
向島寺島村花屋敷百花園内に安置し在り、此福祿壽尊は陶製にして作者及び年代等詳かならざれとも、一見して其古きを知るべし、園主初代を菊塢と云ひ舊と江戸住吉町に住し、後寺島村に三千餘坪の地を購ひ、家藏の尊體と共に移り、自ら鋤を執りて園を開き、文化元年梅樹數百株を植ゑ、傳來せる梅花福祿壽の扁額を尊前に掲ぐ、園の名木に壽星梅あり、弘化二年田安從一位公の命名する所なり、壽星の名は蓋し福壽星に因るものならん、武清の畫ける七福神乘合船の古版は同園の名物として廣く世に知られたり、『我宿の福祿壽なり梅の花』と菊塢の詠みたるを見ても、如何に尊體を信仰なし居たるかを知るべし、又福祿壽尊に就ては、板倉笠齋の書きたる尊像を始め蜀山人の寄贈に係るものは、伊藤公爵より清國人作福祿壽中堂の圖大幅並に韓國人作の福祿壽二百四十字體の刺繍掛額、及び乃木大將よりの古備前作の尊像等あり、門前の碑面は土方伯爵の揮毫なり。

壽老人

向島寺島村白髭神社を以て壽老人に擬す、同社は近江國滋賀郡小松村鵜川に鎭座せる白髭大神の分靈にして、祭神は猿田彦大神なり、村上天皇天曆五辛亥年、慈惠大師關東下向の節、木像を此處に安置したるなりと云へり、一の鳥居に掲げある扁額は小松宮殿下の御眞筆にして、社前の碑面は東久世伯爵の揮毫なり。

毘沙門天

隅田川水神の森の東三町餘の所即ち南葛飾郡隅田村隅田山多聞寺に在り、同寺の緣起に由れば、本尊毘沙門天は、弘法大師の作とかや、同寺は元羽芝の津頭千軒町の邊に在り(今の多聞寺屋敷)、天正年中同寺四十一世の住僧鐵海の頃讃岐國の一老翁弘法大師作の毘沙門天を齎らして此に安置したるものにて、當時此地は榛莽深く、中央に大なる池なり、俗に多聞池と云ふ、池中に毒蛇棲みて人を害じ又妖狸ありて人を惱ませしかば、里民等は此毘沙門天に祈誓を籠め遂に之を退治したりと傳ふ、左れば、其後此毘沙門天を朝日七福神又は勝顏毘沙門天と稱へ、歸依者頗る多しと云ふ、本堂前の碑面は榎本子爵の揮毫なり。



隅田川
七福神之内
白鬚大神
正二位東大世通 稿書
田鶴年社

隅田川七福神の標碑建設

隅田堤の七福神は明治三十一年七福會を起してより以來參拜者の數年々に增加するに至れり、茲に明治四十年十二月八日歲事始の吉日を卜して、七福神所在地の神官住職園主等相計り再興十週年紀念として、七福遊びとて面白き趣向を凝せる祝宴を開き、有志の人々及び諸新聞記者を招待して、七福料理の饗應をなし、餘興として、辨財天に因みて、深川照阿翁の、平曲琵琶あり、宴酣なるに及び何れも七富久の話に餘念なく和氣靄々として笑聲堂に滿ちき、偶々來賓中に、七福神の所在地に標碑を建設せんは如何にと發言せるものあり、會主等曰く是れ僕等の豫ねて希望する所なれども、未だ其機を得ず、幸に各位の御盡力によりて實行ずる事ともならば、此上もなき好都合なりと、是に於て、帝通の北村靈南時事の當舍實仁の兩氏七福神標建碑設發起人となりて、各新聞記者の贊助を求め、富田豐春翁之れが主事の任に當り、明治四十一年三月より、その準備に取掛り、同年七月を以て、六個の大碑石目出度竣功せり。

かくて標銘は土方伯爵東久世伯爵榎本子爵渡邊子爵千家男爵小池掌侍等の揮毫に

成り、田鶴年氏、七福神の本體に因める、珍石を撰定して之れが彫刻の任に膺り、其裏面には篤志家賛成諸彦の姓名を、故市河萬庵翁の門人坪川碌庵氏が、書したるを刻し、茲に始めて各會主等の希望を達するを得たるは、誠に喜ふべき事にこそ。

隅田川七福神睦連參拜の濫觴

七福神を信仰する人々の、熱心なることは今更云ふまでもなきことなるが明治四十一年三月十五日弘福寺に、布袋尊遷座式のありし時の如き數名の信者滿腔の熱誠を以て導歌の聲高らかに唄ひつゝ、先達をなし、無數の見物人をして轉た感賞に堪へざらしめたり、されば本年七福神標碑建設の事あるや、都下の各大師講社中の有志者は、盛んに參拜をなさんと準備をさ〳〵怠りなかりき、隅田川七福會に於ても是等の篤志家に報ゆるには七福神の德をたゝえし導歌こそ、ふさはしかるべしと、是迄諸方の信徒より寄贈せし導歌を、大内青巒居士に乞ひて、添削し、之を印刷して有志者に頒布し、又七福神所在地の各社寺園等に於ては、當日特に七福神各本體の開扉をなし、百花園の如きは、平素一切開門を禁じをる舊江戸時代、將軍御成門と稱せしを開門し、參拜者を迎へて、自製の福茶を饗應し、多聞寺に於ては善男善女の爲め護摩の祈禱を執行し、開運の守を出す事とせり、かくて萬端準備行屆きければ、信者の人には、いよ〳〵四月十六日一同打連れて、巡拜することゝなりたるが、恰も隅田堤の櫻花爛漫たる好時季なりければ、花見を兼たる七福詣とて、早朝三圍神社境内に各講信者、老若男女集會するもの約三百餘名あり、此人々彼の導歌を一聲に唱へつゝ、長蛇の如く堤上を練り行きければ、唯さへ雜沓する觀櫻の群集は、それ七福神詣が來りしとて互に先を爭ひて見物せるさまいと面白かりき、かくて後は篤志團隊の參詣人は隅田川七福睦連と云ふ旗を押立て、毎月十六日打連れて順拜なすことゝ定まれり。

七福神終

明治四十一年七月廿一日印刷
明治四十一年七月廿五日發行

（定價金貳拾五錢）

（禁複載）

編著者　東京市小石川區目白臺高田豐川三十八番地　富田寛　月桂庵豐春

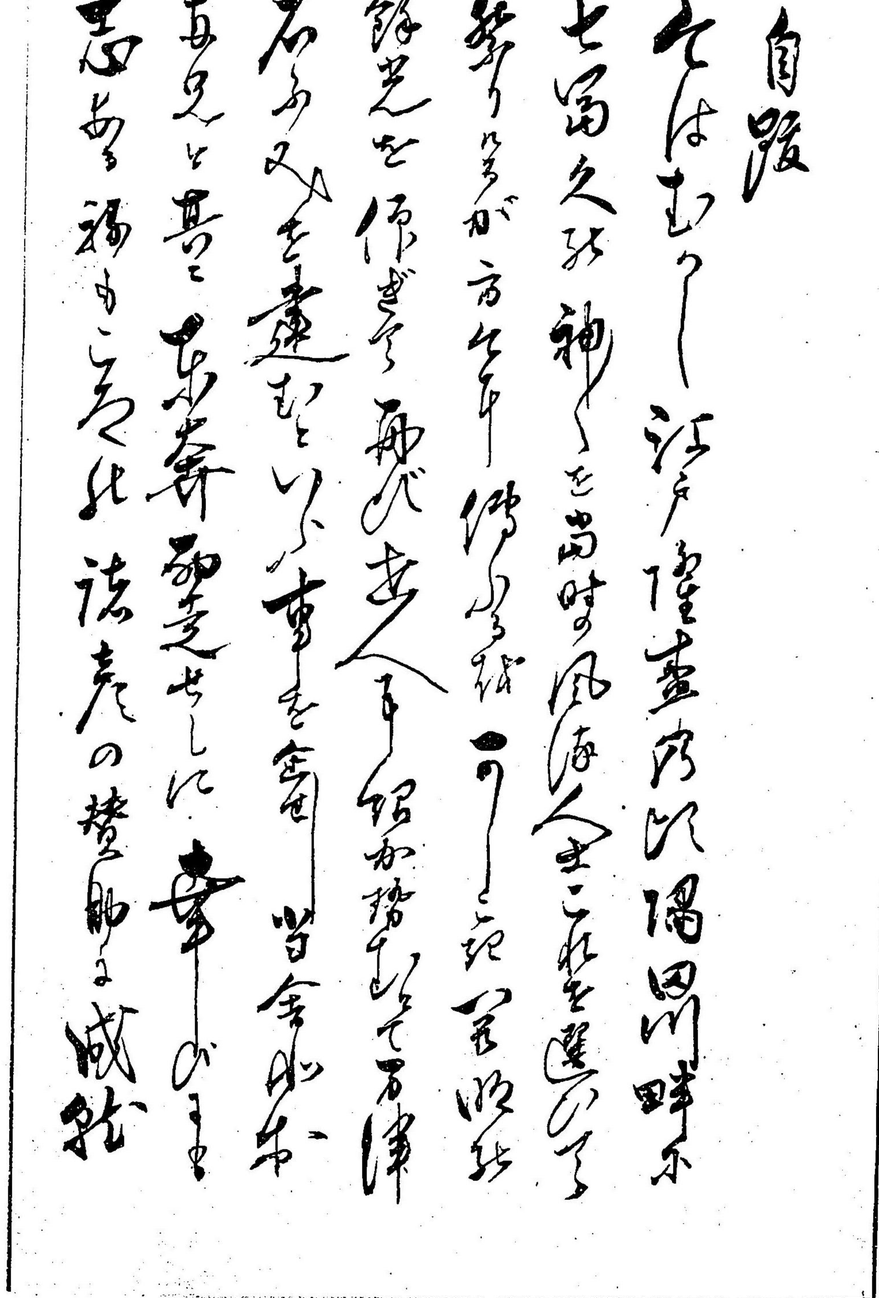
編著者　東京市芝區神明町三番地　鶴岡專念

發行者兼印刷者　東京市神田區通新石町三番地　田中市之助

發行所　東京市神田區新通石町三番地　東陽堂

自跋

[illegible]



2875

すなはち家に見るの事なりき 因て
七福神と題せる小冊子を紀念の為にのせ
集むもとより冊子無智の己自分住せる
力なし 友人東陽堂及鶴呉専念等見
我助力によりて これをものしを へぬ こゝ
ことなし 一言志深しそう

明治戊申孟夏

豐春

1 8
870

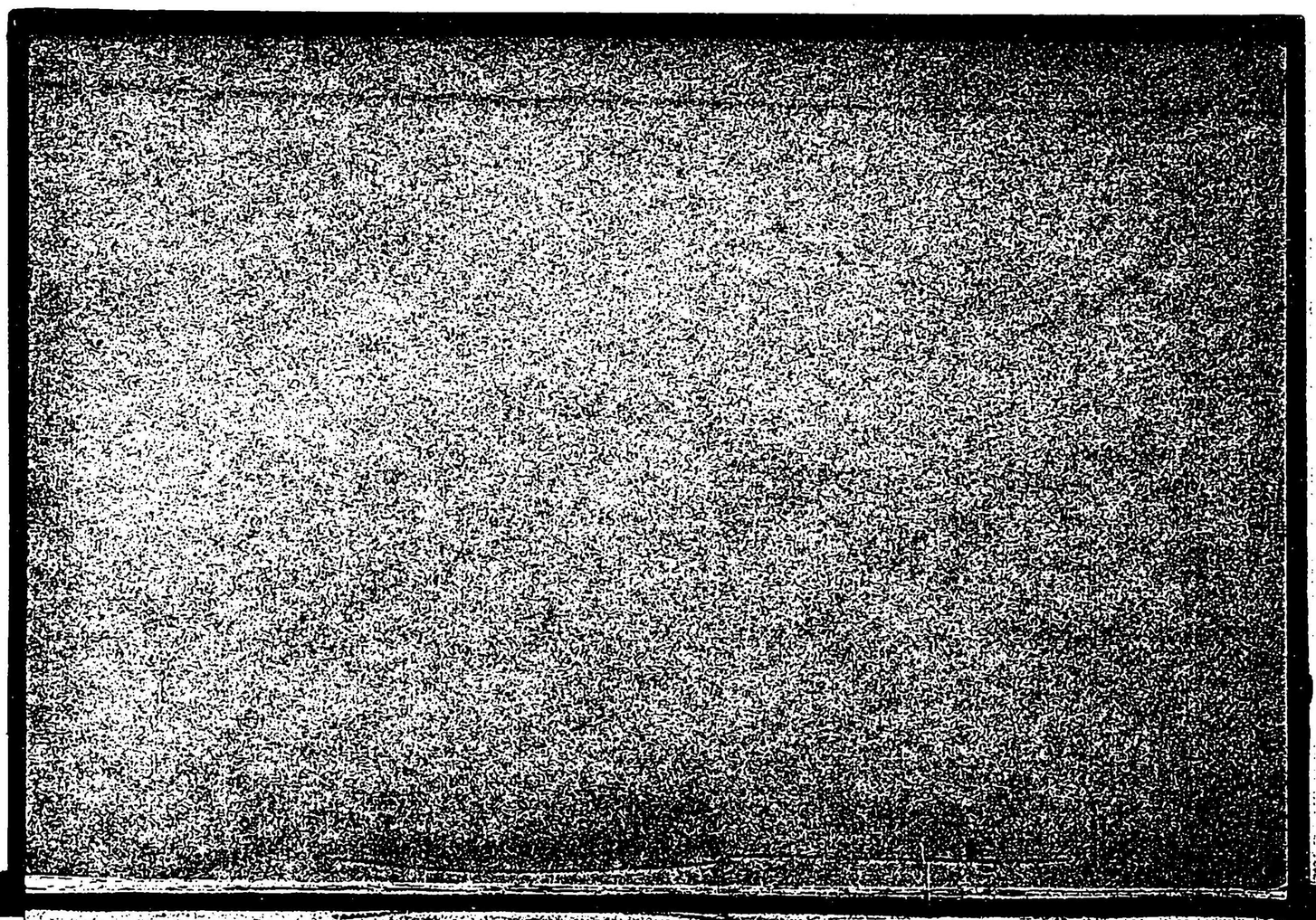
18
870

014102−000−8

18−870

七福神

鶴岡　専念／編

M41

ABB−0367